

前 期

国語

(45 分 100 点)

<注意事項>

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにしてください。
解答用紙は別になっています。
- ② 問題は 【一】 ～ 【三】 まで 3 題あります。
- ③ 試験時間は 45 分です。
- ④ 解答用紙には、以下の例にならって受験番号、小学校名、氏名を必ず記入してください。

受験番号：9038 氏名：興南 太郎 出身小学校：〇〇〇〇小学校 の場合の記入例

のところへ記入してください

得点(記入しないこと)		令和〇年度 興南中学校 〇期入学試験 〇〇	
氏名	興南 太郎		
記入例	小学校名	小学校	
良い例	〇	〇〇〇〇	
悪い例	×		

受験番号	記入しない									
	9	0	3	8						

左から順に 0～9 が並んでいます

- ⑤ 解答は解答用紙の所定のところに記入してください。
- ⑥ 解答は楷書で丁寧に記入してください。
- ⑦ 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

【一】 次の各問いに答えよ。

問一 (1)～(3)の傍線部のカタカナを漢字に、(4)～(6)の漢字の読みをひらがなで答えよ。

(1) 庭で水をア**フ**びる。

(2) 必死のギョウソウで逃**に**げる。

(3) 妹はアイソウがよい。

(4) 血眼**に**なって落としたお金をさがす。

(5) お湯を注**つ**ぐ。

(6) 旅行の支**つ**度をする。

問二 次の(1)～(3)の各文の傍線部の話し言葉を、書き言葉に直して答えよ。

(1) 中学校に入ったら、いろ**ろ**んなこと**に**挑**ち**戦**よう**したい。

(2) 早く帰ろうと思**っ**た**け**ど、でき**な**かった。

(3) たまに遊びにいくのもいい**ん**じ**や**ない**か**。

問三 次の(1)～(3)の各文の傍線部の言葉を敬語に直して答えよ。

(1) 鈴木さんからお菓**かし**子**を**もら**っ**た**。**

(2) 先生が「明日は運動会です」と言**い**っ**た**。

(3) お客様がご飯**はん**を食**く**べ**る**。

問四 次の(1)～(4)の□に、対になる漢字を入れて、四字熟語を完成させよ。

(1) □同□異 (2) □進□歩

(3) □害□益 (4) □変□異

問五 次の(1)～(4)の傍線部のカタカナを漢字に直して答えよ。

(1) キカイをさわるのが好きだ。

(2) キカイ体操の練習。

(3) 左右タイシヨウの図形。

(4) タイシヨウは六才以上だ。

問六 次の(1)・(2)の俳句はどの季節の俳句か、それぞれ漢字で答えよ。また、(1)・(2)の俳句の作者の作品として適当なものをあとの

ア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。

(1) 梅が香に のっと日の出る 山路かな まつおばしやう 松尾芭蕉

(2) こがらし 風や 海に夕日を 吹き落す なつめそうせき 夏目漱石

ア セロ弾きのゴーシュ イ わがはい 吾輩は猫である ウ おくのほそ道 エ なんそうさとみはつけんでん 南総里見八犬伝

問七 次の会話を読んであとの問いに答えよ。

児童A…この前まで、^①紫式部を題材にした番組があったね。

児童B…私もみたことあるよ。歴史の中でも平安時代に興味があったから、知っている人物がたくさん出てきて、面白かった。

例えば、藤原道長や道隆、一条天皇や、中宮定子そして中宮彰子など、出てきていたね。

児童C…藤原道長は、藤原氏の中でも、最も権力を握っていたといわれる人物よね。兄の道隆が先に娘を天皇の妻にしていたから、

どうしても自分も負けていられないと思っただよね。

児童A…一条天皇は定子も彰子も妻にしていたんだね。一条天皇は、先に妻になった定子を愛していたの。

児童B…その定子と彰子にそれぞれ仕えた、いわば専属の家庭教師みたいな存在が、紫式部と清少納言だったのよ。

二人の共通点は^②意思を伝え合う力があつたこと。特に言葉を使う力があつたことだと私は考えているの。

児童C…どっちが、定子に仕えていたの？

児童B…清少納言だよ。清少納言といえば A ではじまる有名な作品があるよね。

児童A…国語の授業で読んだことがある。

児童B…中学校に入ったら習うって兄が言ってたから、楽しみだよ。

児童C…そうだね。古文っていうんでしょ。いろいろな古文を読んでみたいね。

(1) 傍線部①「紫式部」の作品を次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 枕草子 イ 万葉集 ウ 平家物語 エ 源氏物語

(2) 傍線部②「意思を伝え合う」を外來語に直してカタカナで答えよ。

(3) A に入る作品の冒頭として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 今は昔竹取のおきなどいふものありけり。 イ 春はあけぼの。

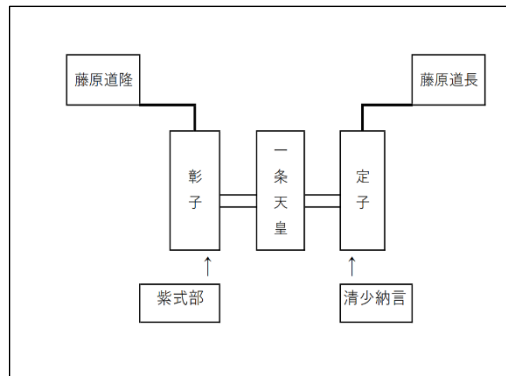
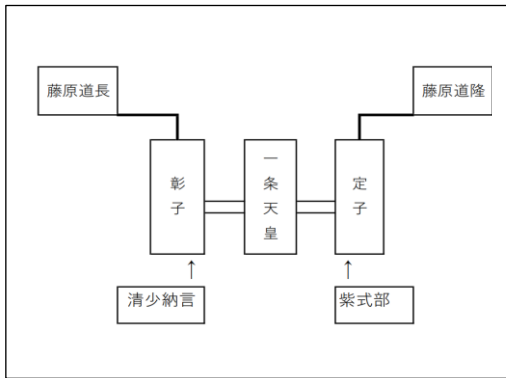
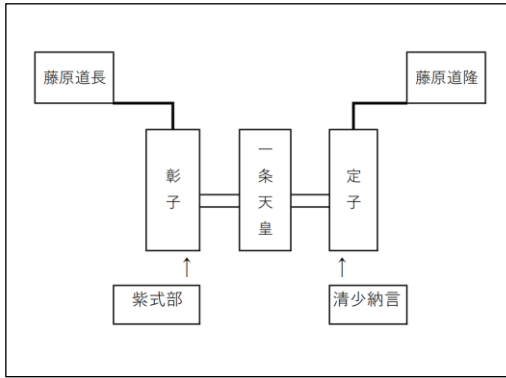
ウ つれづれなるままに、ひぐらし… エ ゆく川のながれはたえずして…

(4) この会話から、当時の人間関係を図にしたものとして、最も適当なものを次のア～ウから選び、記号で答えよ。

ア

イ

ウ



【二】次の文章を読んであとの間に答えなさい。答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入すること。なお、指示された表記方法以外で解答した場合は採点されないため注意せよ。

四世紀ごろ、中国大陸で生まれた漢字というものが、日本に入ってきました。

人々は漢字を中国語の字音で発音するほか、すでにあつたやまとことばに漢字をふりあてました。この字音読みを音、やまとことばの読みを訓というのだと信じている方が多いのですが、じつは単純にそうとはいいきれないのです。

伝承した漢字すべてに対になるやまとことばがあつたわけではありません。たとえば、「麦」という字の音は「ばく」、訓は「むぎ」だと学校で習ったでしょう。そうすると、中国語の発音が「ばく」で、日本では昔から「むぎ」と発音していたのかと納得してしまうのですが、これはあやまりです。

「麦」という植物は、もともと日本にはなかった。^①だから「麦」を意味するやまとことばもありませんでした。

②では、なぜ「むぎ」という読み方があるのか。これは、原音の「ばく」が変化して「むぎ」ということばができたのだと思われます。

これもまた、現代の発音での説明は便宜的な^{べんぎ}ものですが、「ばく(baku)」も「むぎ(mu^{べんぎ}gi)」も、最初の「ば」と「も」は、ともにくちびるを閉じて発する音で、よく交替^{こうたい}します。とくに、日本にいちばん古く入ってきた音である呉音^このb音は、次に入ってきた漢音^{かん}でm音に変わります。

(中略)

このように「むぎ」は外来語の「ばく」が日本語化したことばにすぎないのです。^③「むぎ」と同様、漢字から生まれた訓に「かみ」と「ふみ」があります。

紙の製法は二世紀の初頭、中国大陆で発明され、日本には文字が伝承したもつと後、七世紀初めごろに伝わったとされています。紙が伝わる前から、木や竹を平らにけずった「簡（かん）」が渡来^{とらい}しており、日本人はそれに文字を書いていた。木簡、竹簡とよばれるものです。

この「簡」を、今、私たちは「かん（kan）」とよみますが、渡来した時は「かむ（kamu）」です。この「kam」に「-i」がついて、「かみ（kami）」ということになりました。日本語には、口を閉じたままの「-m」という音がないので、発音できない。そこで「かみ（kami）」となったのです。紙は、「し」という音とともに日本にやってきました。^④しかし、すでに日本には文字を書くものとして「簡」が存在していましたから、そのまま「紙」のよみとして「かみ」を使いました。^⑤つまり「かみ」は外来語です。

「ふみ（文）」もまた外来語です。

このようなケースはほんの一例で、やまとことばだと信じ込^こんでいる外来語は山とあることでしょう。そのような誤解を助長しているのが、^⑥音と訓に対する間違^{まちが}った認識^{しんしき}です。日本は昔から地理的^{じりき}な状況から絶えず外来語を受け入れてきました。それをそのまま自国語に取り入れたり、在来^{ざらい}の日本語をあてたりして、積極的に取り込むことで、豊かな文化を築いてきたのです。

日本語は、漢字によって飛躍^{ひやく}的に進化しました。^⑦漢字は使い勝手がよく、日常に欠くべからざる存在です。しかし、その功^{こう}とともに罪^{ざい}の部分も認めなくてはなりません。音と訓の誤解もそうですが、それよりも大きな問題は、漢字が日本語のもつ働きの意味をう

ばってしまっていることです。

日本語は「かく（書く・欠く・掛く）」のように漢字ではさまざまに書き分ける内容をすべてもっています。このように多様な日本語の、その場その場の内容をひと目で識別できる手段が漢字です。だから、いきおい漢字を多用するようになる。とくに最近では、パソコンですぐに難しい漢字が出てくるものだから、なおさら安易に漢字を使用する傾向にあります。

しかし、そうした漢字依存が、日本語のもつ本来の意味を失わせていくことになります。

たとえば、右にあげた「かく」は、文字や絵を「かく」時に用いますが、このことは、漢字や簡や紙が渡来する以前からあったと考えられます。

文字がないのに、どうして「かく」ということばがあるのか。その答えが縄文土器です。土をこねて成形したものに、縄目をはりめぐらしたり、縄文様などを刻んだりする。この時、先のとがったもので、やわらかいねん土を引っかくでしょう。最初の「かく」とは引っかけて表面の土や石を欠くことだったのです。

ものに、傷をつける「かく」行為は、指を使って行う動作です。後世の例ではありますが、琴を「かき鳴らす」など、「かく」は指先やつめで何かを動かすことを示す接頭語として用いられることがあります。ですから漢字が入ってきた時、指をつかって何かを記す動作を「かく」といい、同じく指で絵に表すことも「かく」といったのです。そして両者を「書く」「描く」などと漢字を変えて区別するようになりました。

しかしそのために、「かく」というやまとことばが、本来はどういう働きをしめすものなのかが、わかりにくくなってしまうしました。

一休ばなしに「このはしわたるべからず」という、有名な話がありますね。単なるダジャレのように受け止められていますが、これこそ、日本語の豊かさを示してくれるお話です。「はし」が橋なのか、端なのかどちらの意味だろうかと、意味を限定して理解することほど、日本語をやせさせるものはありません。

さらに、「はし」には本来、「間」の意味がありました。たとえば箸は二本の間でつかむから「はし」、鳥の「くちばし」も同様です。両岸をつなぐから、橋を「はし」といったのです。この一休ばなしから、「橋」「端」「間」を思い浮かべる遊びは、楽しいではありませんか。

最初にあげましたが、柳田国男は「どんな字病」ほどおそろしい病気はないといいました。それは、「どんな字を書くのですか」と絶えず問いかける人々への警鐘です。

日本語は包容力のある、創造性豊かなことばなのです。

【語注】

（山口謠司『へひらがな』の誕生』KADOKAWA ※作問の都合上一部改変）

＊1 呉音：日本漢字音の一種。中国の呉の地方の音が伝わり、仏教語に多く用いられている漢字音。

＊2 漢音：遣唐使・留学生などによってわが国に持ち込まれた漢字音の一種。

＊3 接頭語：常に他の語の上について、その語とともに一語を形成するもの。語調を整えたり、意味を添加したりする語。

＊4 柳田国男：「日本民俗学」の創始者で、近代日本を代表する思想家。

問一 傍線部①「だから」・②「では」・④「しかし」・⑤「つまり」は、前後をつなぐ役割をもつ言葉である。それぞれ、どのような役割を持つ言葉か。最も適当なものを次のア～キから選び、それぞれ記号で答えよ。

ア 前の事柄から話題を^{ことば}変える。

イ 前後が対等な関係で並んでいる。

ウ 前の文の内容をまとめたり、言いかえたりしている。

エ 前の内容について、具体的に説明している。

オ 前と後が因果関係になっている。

カ 前の内容に対して後の内容が反対になっている。

キ 前の内容について、不足する情報をおぎなっている。

問二 傍線部③『むぎ』と同様、漢字から生まれた訓」とあるが、その説明として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア すでにあつた、やまとことばに漢字をふりあてた読み方。

イ 外来語である中国語の発音が、日本語化した読み方。

ウ どの国かは不明だが、外来語として古く日本に入ってきた読み方。

エ もともとはやまとことばだった発音が、中国へと伝わった読み方。

問三 傍線部⑥「音と訓に対する間違った認識」とあるが、それはどのような認識か。それを説明した次の文の（ 1 ）・（ 2 ）に入る言葉を、本文中から指定した文字数で抜き出して答えよ。

（ 1 四字 ）を音読み、（ 2 九字 ）を訓読みと認識していること。

問四 傍線部⑦「漢字は使い勝手がよく、日常に欠くべからざる存在です」について次の問いに答えよ。

(1) 漢字がそのような存在になるのはどのような理由からか、「くだから」に続くように、本文中から二十一字で特定し、初めの五字を答えよ。

(2) また、漢字がそのような存在であるために、どのような状況を生み出したのか。本文中から四字で特定し、抜き出して答えよ。

問五 傍線部⑧「これこそ、日本語の豊かさを示してくれる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 日本語は漢字で書き分ける内容をすべてもっており、多様な意味を含むことができるということ。

イ 日本語はひらがなで書くことで、誰にでも読めるという利点を持ち、わかりやすいということ。

ウ 日本語には漢字にはない、ダジャレというユーモアが常に生まれるということ。

エ 日本語には意味とは関係なく、漢字を当てはめるという遊びが生まれるということ。

問六 傍線部⑨「それは『どんな字を書くのですか』と絶えず問いかける人々への警鐘です。」とある。警鐘とは、良くない方向へと向かっていることを指摘し警告するという意味であるが、柳田はどのようなことを警告したいのか。次の問題に答えよ。

漢字を用いることで（ 1 九字 ）してしまい、その言葉が本来（ 2 六字 ）を持つものがわからなくなってしまうため、人々が常に漢字に置き換えようとすることに警告している。

問七 本文に述べられた筆者の考えの説明として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 漢字の使用を制限しないと、日本語の働きをどんどん失うことになり、やまとことばが使われなくなっていくため、漢字の使用はある程度制限していく必要がある。

イ 日本語は一つのことばに多様性があり、漢字を用いて内容を区別する必要がある。そのため、漢字は特に学習しておく必要がある、その場その場で適切な漢字を使い分ける力が必要である。

ウ 日本語には、一つのことばに多様な意味を思い浮かぶことができるという豊かさがあり、意味を限定しないという包容力もあるため、常に漢字ばかりを気にする必要はない。

エ 日本語には、漢字を用いないと正確な意味が伝わらないという欠点があるが、「このはしわたるべからず」のようにダジャレとして、ユーモアを伝えるときに意味の広がりを持つという長所がある。

【三】 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

真面目でくつろぐっぽい大学生の典子^{のりこ}は、母親にすすめられて、いとこの美智子と一緒に茶道を習い始める。

茶道の細かい作法にとまどいながらも、武田先生のお稽古^{けいこ}に取り組み、だんだんとお茶の魅力^{みりょく}にはまっていく。

「お茶席に入ったら、まず、^{*1}床^{しこ}の間の掛け軸^{*2}と、花を見なさいね。お茶の『一番のごちそう』は、なんといっても、掛け軸なんですからね。」

「……ごちそう？」

和菓子^{わがし}とお茶が「ごちそう」なのは、わかる。茶道具にはおどろかされる。季節のかれんな草花や、ふくらみかけた椿^{つばき}も、素敵だった。

しかし、「掛け軸」だけは、おもしろくなかった。

「今日の掛け軸、読める？」

「……？」

達筆なのか、ヘタクソなのか、一文字も読めない。ぐにやぐにやしたり、暴れたり、わざと一般人^{いっばんじん}には読めないように書いてるとしか思えず、^①腹^{はら}が立^たつてくる。

それらが、^{*3}禅寺^{ぜんじ}の高僧^{こうそう}の筆だと聞くと、わざと難しくして、エラぶっているように思えた。

先生はいつも「今日のお軸はね」と、読み上げてくれた。

ぬ 抜けるような五月晴れの土曜日に読んでくれたのは、

くぐんばう 「薫風南より来たる」

軽くあせばむ夏日には、

「清流間断なし」

かき 庭の紅葉も柿の葉も、燃えるような赤に色づいた晩秋には、

しも ば はやし 「霜葉林の花」

掛け軸の言葉がその季節を表しているということは、私にもわかった。

けれど、「一番のごちそう」というほどおいしくも、楽しくもない。

みんな、掛け軸の言葉には「はあ」とうなずくだけなのに、和菓子となると「あら〜!」「おいしそー」と、黄色い声を上げた。

私たちは い。

梅雨明け直後の土曜日だった。朝から三十度を超す猛暑になった。お稽古に行く途中、歩道のアスファルトがじりじりと照り返した。

先生の家の玄関に入ったとたん、背中をあせが走り下りた。額をハンカチでふきながら、いつものように手前の部屋の「乱れ箱」

に荷物を置き、白いソックスをはいて稽古場に入った。

「こんにちは」

挨拶を終え、床の間に目をやった。

人の背丈ほどある掛け軸が掛かっていた。

その長い紙の頭のあたりに、たった一文字、

「瀧」

と、太く勢いよく、堂々と書いてあった。

その下はすべて余白…。

「瀧」の筆の最後をハネず、そのまま余白を一気に、どおーっと、紙の下まで書きぬいていた。勢いあまって、墨の小さな飛沫が散っていた。

(…!)

一瞬、水しぶきを顔に感じた。

滝壺から、冷気がふき上がった。

あせにぬれた背中が、スーッとした。

(あー、すずしい)

その時、私の目から、^②分厚いウロコがポロリと落ちた。

(あつ！掛け軸って、こういうものなのか！)

難しくてわからないと言う思いこみが、いっぺんにふき飛んだ。

文字を頭で読むのではないのだ。絵のように、ながめればいいのだ。

(なあ〜んだ)

③ 難しく、エラそうなものだと思っていたが、こっちの思いこみを外してみれば、なぞなぞに似ていた。

「達筆なのか、ヘタクソなのか」と腹が立った筆文字は、自由自在な遊び心がえがいた絵文字だったのだ。

センスと筆一本で、床の間の壁に滝かへを出現させ、水しぶきまで体験させてしまう。

(すごい……)

先生が、(ね)という目をした。

その日から、床の間を見る目が、がらりと変わった。

十月半ばのお稽古日、私はその掛け軸を見ていた。

「〇」

「……？」

文字ではない。筆で、ただクルリと、大きな丸がえがいてある。

「今日のお軸は、さあ、なーんだ？」

「……？」

「わからない？……今夜は、お月見」

「あ！ろか！」

月の下に置かれた花入れに、春明菊しゅんめいぎくとすすきが一本、**は**入っていた。

師走しわすの稽古日。空が**に**曇くもり、天気予報は「山沿いで雪」と伝えていた。その日、先生が読み上げてくれたのは「ろうせつ、天に連なって白し」

「ろうせつって、なんですか？」

④「十二月に降った雪のことよ」

よく見ると、掛け軸の表装の布地に、点々と白い模様があつた。

（ああ、雪……！）

私は思わず、空からふわふわ舞まい降りてくる白いもの pensando、目を閉じた。

掛け軸から風がふき、水しぶきが飛び、月がのぼり、雪が舞った。

（あー、やっぱり、来てよかった）

お稽古に行けば、きっとそう思う瞬間しゅんかんがあつた。

私たちは、ますますわからなくなるお点前*4 てまえをくり返しながら、和菓子を食べ、道具にさわり、花をながめ、掛け軸からふいてく

る風や水を感じた。

今という季節を、視覚、聴覚^{ちようかく}、嗅覚^{きゆうかく}、触覚^{しよくかく}、味覚の五感ぜんぶで味わい、そして想像力で体験した。毎週、ただひたすら。

⑤ やがて、何かが、変わり始めた…。

(森下典子『日日是好日』新潮社 ※作問の都合上一部改変)

【語注】

*1 床の間…和室に設けられた花や置物などをかざる空間。

*2 掛け軸…書や東洋画を表装してかざったもの。

*3 禅寺の高僧…仏教の一派。その中の、位の高い僧のこと。

*4 お点前…お茶をたてる一連の作法のこと。

問一 傍線部①「腹が立つてくる」について次の問いに答えよ。

(1) ここでの「腹が立つ」という慣用句が表している様子として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 掛け軸はわざと読みにくく書かれている気がして、どこか気に入らない様子。

イ 掛け軸の内容が難しく、説明されても理解ができずにイライラしている様子。

ウ 掛け軸に書かれた文字は難しいので疲れてしまい、お腹がすいてしまう様子。

エ 掛け軸が「ごちそう」という意味が理解できず、どうにも落ち着かない様子。

(2) 「腹が立つ」のように、次の()に体の一部を漢字で答え、慣用句を完成させよ。

① () を明かす……思いがけないことで相手を驚かせる。

② () をなで下ろす。……安心すること。

問二

いに入る最も適当な言葉を次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア うそつきだった イ 正直だった ウ あいまいだった エ 秘密にした

問三 傍線部②「分厚いウロコがポロリと落ちた」について次の問いに答えよ。

(1) ここでの「分厚いウロコ」の内容として、最も適当な部分を本文中から十六字で特定し、初めの五字を抜き出して答えよ。

(2) 「ポロリと落ちた」ことで、どのような変化が起きたか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 教室に通い始めた頃と、今の私の顔つきの変化に気づき、先生の私に対する印象が変化した。

イ 熱い夏の日差しから解放され、汗も引いたことに気づき、とても清々しい気持ちへ変化した。

ウ 文字の書体は、何かを表現したものであることに気づき、書かれた文字を見る目が変化した。

エ 退屈たいくつだったお茶の勉強も、考え方で変わること気づき、教室へ行く向き合い方が変化した。

問四 傍線部③「難しく、エラそうなもの」とは何のことか。本文中から七字で特定し、抜き出して答えよ。

問五 ろに入る適当な言葉を、漢字二字で答えよ。

問六 は・にに入る言葉として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア ピカピカと イ ぎつしりと ウ くつきりと
エ ひよろりと オ さつぱりと カ どんよりと

問七 傍線部④「十二月」の異名は「師走」だが、「二月」の異名として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 如月 きさしげ イ 睦月 むつき ウ 皐月 さつき エ 水無月 みなづき

問八 傍線部⑤「やがて、何かが、変わり始めた…。」とあるが、本文の私の変化を次のように説明した。(1)～(3)に入る言葉を、本文中から指定した文字数で抜き出して答えよ。

お茶席での (1 三字) を最初は難しく感じ、読めずにイライラしていた。しかし、「瀧」とだけ書かれた書を見て、その表現が文字ではなく (2 一字) として楽しむものだと思づく。月見や雪をテーマにしたものを通じて、それらが表現しようとすることを理解し、五感と想像力で (3 二字) を感じるようになっていく。